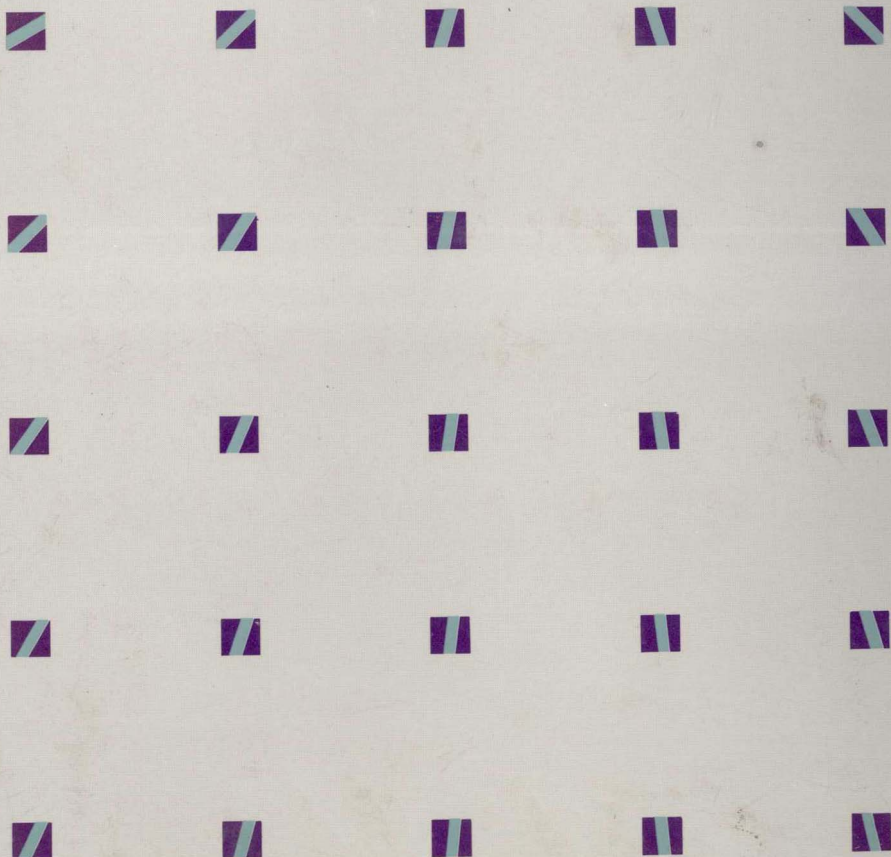


社会政策のからくり

社会政策批判の展開

渡部恒夫 著



社会政策のからくり

—— 社会政策批判の展開 ——

渡部恒夫 著

ぎょうせい

〈著者略歴〉

わた なべ つね お
渡部恒夫

1966年 早稲田大学第一商学部卒業

1969年 早稲田大学大学院商学研究科修士課程終了（商学修士）

1973年 立教大学大学院経済学研究科博士課程単位取得の上退学

1977年 鹿児島経済大学経済学部助教授

著書 『社会政策の謎——社会政策批判の方法——』（ぎょうせい、1988年）

現住所（勤務先）〒891-01 鹿児島市下福元町8850
鹿児島経済大学経済学部
☎ 0992-61-3211 内線539
FAX 0992-61-3239

（自宅）〒891-01 鹿児島市下福元町7192-47
☎ FAX 0992-61-3224

社会政策のからくり

——社会政策批判の展開——

1991年5月1日 初版発行

著者 渡部恒夫

発行所 株式会社 ぎょうせい

東京都新宿区西五軒町4-2

印刷所 ㈱行政学会印刷所(SE)

ISBN 4-324-02576-2 C1033

序 文

本書は、主として内外の社会政策・労働経済・社会福祉の理論を研究したものである。

第一章は、拙著『社会政策の謎——社会政策批判の方法——』（ぎょうせい、1988年）全体のエッセンスを、体系的に叙述したものである。社会政策の本質は経済主義という形態での社会改良主義にあり、その任務は社会主義を防止することによって資本主義を維持することだと、私は考える。本章は、社会政策なるものが、いかなる仕組みを通じてその任務を果たそうと努めるのかの謎を、社会主義の古典に依拠して解明しようとしたものである。タイトルの「からくり」とは、その仕組みという意味である。『大辞林』（三省堂）によれば、計略、たくらみという意味もある。本書では、そのような意味も込めている。人間社会の歴史の自然の歴史との最大の違いは、人間が意欲を持って主体的に歴史の進行に係わるという点である。社会の歴史は、人間の意志から独立した客観的な条件に規定されながら、人間の主体的な働きかけによって形成される。先進的な資本制社会では、保守側の主体は可能な限り、抑圧力の代わりに社会政策などを使って、更新側の主体の成熟を妨げることによって、自己の好む我が世の春の永続を計るのである。フィリピンの碩学、R. コンスタンチーノ氏は、この妨害を精神に対する暴力とさえ言う。通常、鞭に対する飴とか、非暴力とかと呼ばれているものを。だが、究極のところ、人間的に生きることを求める大衆の主体が、保守側による更新側の主体形成の妨害の「からくり」をまず理論の上で暴露し、最終的には実践の上でそれを打ち破って前進するのである。私の代表作である本稿は、大衆の主体形成の保守側による妨害の「からくり」を、いまだ解かれざるこの謎をある程度解明したものである。

第二章は、1955年頃の我が国に、社会政策の代わりとして労働経済学という労働問題研究の枠組みを導入された、隅谷三喜男氏の「労働経済

学」を批判的に検討したものである。私は、隅谷説の批判を通じて、労働問題研究の社会政策学からの解放は、労働経済学で社会政策学に取って代わらせることではなくて、労働経済学の批判から社会政策学の批判にまで進むことによって初めて可能であるという考えを述べている。本書に収録しなかったものも含めて、隅谷理論の一連の検討は若い頃の私の研究のスタートラインであった。若気の気負いが感じられるし読みやすくないが、正直なところ、この理論が一世を風靡した頃と違って今となっては、書き直す労をとる気になれないのでそのまま収録している。ともあれ、この作業によって、私のスタンスが決まったのであった。

第三章、第四章、第五章は社会政策の大河内理論、岸本理論という我が国の社会政策学の代表的なものを含む三つの学説を、その国家観という側面から考察し、それらが多かれ少なかれマルクス主義の国家論といかに違うかを明らかにしている。そのことによって、この分野の我が国の最良の理論でさえもが、社会改良主義的性格を免れていないことを示している。戦前、戦中の思想統制を大河内理論が生きのびることができたのは、一つにはそれが経済理論にすぎず、本来的な国家理論を避けたおかげであり、二つには経済理論にしても生産力説といわれるものにすぎず、生産関係を重視する本来的な経済学を避けたおかげでもある。本当のことを知るためには、かつての思想統制下で許されなかったものにこそ光を当てる必要があるのではないか。本書三、四、五章で国家論を重視し、その他で経済学とはいかなるものかをも重視するゆえんである。

第六章は、社会政策学会第79回研究大会（関西学院大学）の総括討論で私が報告したコメントを書き直して、社会政策叢書第13集、『戦後社会政策の軌跡』（啓文社、1990年10月）に収録されている「総括討論のためのコメント」を、啓文社の許可の下に転載したものである。この学会の共通論題は「戦後社会政策の軌跡」というものであり、戦後の社会政策の軌跡を研究史も含めて整理し直して、21世紀への展望を見出したいというものだった。私のコメントの要点は、研究史への言及が避けられた点

に、新地平の開拓がほとんど全くできなかったことの原因がかいま見られ、当学会は思想的活力を欠いているというものだった。

第七章は、寡聞の故か取り上げられることのない、極めて重要な理論問題を提起したものである。それは第一に、社会的矛盾が解決されるのは、その鈍化を通じてなのかそれとも激化を通じてなのかという問題である。第二に、更新側が保守側から奪い取る譲歩という要素と、更新側と保守側の矛盾の変化という要素の二つが、一体いかなる関係にあるのかという問題である。日本の伝統的な社会政策学は、労働者が資本家から獲得する成果（譲歩＝改良）に注目する。しかし何故か、その時両者の矛盾がどうなるのかの問題を、考慮外に放置するきらいがある。これは、日本社会政策理論における、偉大なる盲点ではないか。また、毛沢東の『矛盾論』は明らかに矛盾の激化による発展論であるが、特に先進資本主義国で重要な機能を果たす譲歩＝改良にほとんどまったく配慮していない。これまた、毛沢東『矛盾論』における偉大なる盲点ではないか。本章は、社会問題の解決すなわち社会の発展と、矛盾の変化との関連がどういうものかという問題を解決した、すなわち、上述の二つの問題を解決していたプレハーノフ説を掘り起こして紹介したものである。この学説は、毛沢東の『矛盾論』が先進国の現実に適用される時に欠けているものを、補ってくれるように思われる。また、この説は、労働経済学・労働問題・社会政策学・社会福祉学等の社会問題についての学問のパラダイムを正しく転換する際の、つまり正しく代案を立てる際の枠組みまたは骨組みを暗示しているように思われる。

第八章、第九章、資料Ⅲは、北欧福祉国家デンマークとスウェーデンおよびアメリカの社会政策論＝社会福祉論を、ひとつずつ検討したり紹介したものである。

第八章のベレガード説は、社会政策＝社会福祉の本質は政治的機能にあり、労資関係＝搾取関係に起因する社会的不平等と緊張を、資本主義的秩序の維持のために隠蔽し偽装することだという、政策担当者の明晰な証言である。

資料Ⅲのガルパー説も、ベレガード説と似た思想を別の言葉で語っている。ガルパー説は単なる紹介でしかないので、資料としている。

第九章のミュルダール説は、良心的な保守主義者の所説であり、内外の援助の動機は貧窮者に対する人間的連帯感と同情だというものである。一国福祉国家の限界の認識には同感であるけれども、観念的＝空想的思考方法がその限界になっており、連帯と同情にもとづくその福祉理論だけでなく、福祉世界の展望にも社会科学としての信頼感に欠けるように思われる。

資料Ⅰは、労働経済学であれ労働問題であれ、社会政策であれ社会福祉であれ、それらを根底的に吟味する際に不可欠の根本問題すなわち経済学とはいかなるものかの答を模索したものである。ここで扱った素材は限られているが、次の点が明らかになった。経済学の任務は、出現する社会的弊害が現存生産様式の必然的な結果であり、その分解の近いことの印であることを証明すること、分解しつつある生産様式の中に、この弊害を除去する将来の生産と交換の新しい要素を発見することにある。

資料Ⅱは、日本史の時代区分についての一つの学説を紹介したものである。私は、社会政策の資本制維持機能のメカニズムを解明する仕事に従事してきたが、その際、資本制の前の封建制、資本制の後にありうるまたは必然だという社会主義に触れずにはすまなかった。しかし、我が国の奴隷制がいつ終わり、封建制はいつ始まりいつ終わったのかについては、要するに日本史の時代区分が皆目わからなかった。それは同時に、歴史を区分する基準は何かという問題でもある。そこで、気にかかっていた文献をある時思い立って精読してみて、目からうろこの落ちる思いをした。ここでは、寺尾五郎氏のその学説を紹介した。

資料Ⅲは、アメリカで最も抵抗力を持つという、ガルパー氏の体制批判的な社会福祉論を紹介した。彼は、社会的サービスがいかにして現社会体制を支えているかを、鋭く解明しようとしている。

資料Ⅳは、宮川澄氏が指導され、私自身も参加した我が国の東北地方

の農山漁村の実態調査の紹介である。1961(昭和36)年制定の農業基本法が効を奏して、調査したどの村もみごとに破壊されつつあった。そして、昭和30年代後半から昭和40年代後半にかけて、零細農漁民は賃銀労働者として資本に包摂されていった。それは、重化学工業主導の経済の高度成長に必要な安価な外国農産物を輸入し、安価な労働力を農山漁村から調達する政策の必然的な帰結であった。この農業問題は、同時に労働問題でもあった。その意味で、この報告の紹介を本書に収録することにした。

本書は、『現代の社会政策学と労働経済学・第二版』(高城書房, 1987年)の増補改訂版である。この度、「ぎょうせい」のご好意で出版し直すに当たり、内容を適切に表現したタイトルを採用した。なお、私のもう一冊の著書である『社会政策の謎』(ぎょうせい, 1988年)は、くだけたそのタイトルとは逆に、「社会政策の原原論」とか「骨と筋ばかりで食えない」などという妙なおほめの言葉をいただいている。『謎』は、本書第一章に総括されたところの、諸論文より成る。『謎』が、私の社会政策批判の「方法」とすれば、本書は一応その「展開」に当たる。縁あって、本書を手にした方は『謎』もお読み下さい。また、ぜひ私宛に感想をお寄せ下さい。著者とは、自分の精神的な分身である自著が、どんな方にいかに読まれているか気になるものである。また、読者とは、実は著者と心の対話を交わしながらも、著者に感想を伝えるのがおっくうなものであることは、私も例外ではない。しかし、ぜひ、感想を。

最後に、現代日本で類書がないと言われている『謎』と『からくり』の二部作が日の目を見ることができたのも、ひとえに、恩師はじめ両親その他内外の多くの方々之恩恵の賜物である。特に、労働問題に目を開かせていただいた永山武夫早稲田大学教授、経済学の手ほどきをしていただいた山本二三丸立教大学名誉教授、国家論と農村調査を指導していただいた故、宮川澄前立教大学教授の三先生に教わったものが、私の基礎的な素養になっている。また、永らく、研究と教育の自由と生活を保障していただいた、勤務先の津曲学園のおかげである。また、「ぎょうせい

い」の本田穰氏を初め担当の方々には、『謎』と『からくり』の双方の出版に際して大変お世話になった。また、鹿児島県の長島文化財団には、『謎』の出版に対して助成をいただいた。末筆ながら、各位に感謝の気持ちを表明させていただきます。

1990年8月18日 錦江湾に浮かぶ桜島を遙かに望みつつ

目 次

第一章 社会政策はいかにして資本主義を維持しようとするか

ま え が き	2
第一節 社会政策の意味	2
第一項 社会政策用語の三つの意味	2
第二項 社会改良主義の本質＝反社会主義	4
第三項 社会改良主義の難点	5
第二節 社会政策の資本制維持機能の構造	7
第一項 最小限綱領と最大限綱領の切断，最小限綱領の自己完結化 ＝社会改良主義	7
第二項 最小限綱領中の経済的改良と政治的改良の切断，経済的改 良の自己完結化＝経済主義	10
第三項 経済主義＝階級的性質の転換	11
第四項 手段と目的の切断，手段の自己完結化＝変革の主体的条件 の破壊	12
第五項 社会改良主義の限界性・不徹底性＝社会主義の民主的前提 の成熟の阻止，民主主義の社会主義への成長・転化の阻止	17
第六項 国家の譲歩機能と強制機能の切断，譲歩機能の自己完結化 または過大評価，強制機能の過小評価	19
第七項 強制の対象を労働者から資本家へ，保護の対象を資本家か ら労働者へ，対労働者国家機能を強制から保護へ，対資本家 国家機能を保護から強制への，すりかえ	22
あ と が き	24

第二章 労働経済学の批判から社会政策学の批判へ

ま え が き	26
第一節 隅谷三喜男氏「賃労働の理論」における経済の問題	28
序	28
第一項 「賃労働自体」について	31
第二項 「使用価値の視点」について	35
第三項 「労働力と労働者の不可分性」について	41

第二節 隅谷三喜男氏「賃労働の理論」=「労働経済論」におけ る哲学的思考方法の問題	45
序	45
第一項 矛盾概念について	47
第二項 隅谷理論の「反弁証法的」・「形而上学的」性格について	62
第三節 社会政策学の止揚の方向	68
序	68
第一項 「労働経済論」と社会政策学との関連について	69
第二項 「社会政策における階級闘争」より「階級闘争における社 会政策」へ	72
あとがき	75
第三章 国家に階級的性格はないのか——社会政策論における超 階級国家論——	
まえがき	80
序 中村正文氏の国家観	82
第一節 国家の階級性をめぐって	83
第一項 無階級=無国家社会における氏族制度の崩壊過程と国家の 成立過程	84
第二項 国家の階級的性格	93
第三項 秩序の実体	94
第二節 社会政策の主体としての国家について	95
あとがき	97
第四章 国家の強制は資本に対してか、国家の保護は労働者に対 してか——社会政策の大河内理論——	
まえがき	100
序 大河内一男氏の国家観	100
第一節 国家問題の回避・黙殺の志向	103
第二節 「総資本」が「個別資本」を抑制する道具という国家 の規定	105

第三節 近代資本主義国家の固定化・永遠化	111
あとがき	113
 第五章 国家の機能は譲歩か強制か——社会政策の岸本理論——	
まえがき	116
序 岸本英太郎氏の国家観	117
第一節 「組織化され集中化された権力としての国家」という 規定について	121
第二節 譲歩の過大評価と強制の過小評価について	128
第三節 社会政策の岸本理論および大河内理論の国家観とレー ニンの国家観の相違と関連について	135
第四節 社会政策の限界と社会政策論の限界について	139
あとがき	141
 第六章 社会政策学の新地平はなぜ切り開かれなかったのか ——第79回社会政策学会研究大会総括討論のためのコ メント——	
まえがき	144
第一節 共通論題の「主旨」について	144
第二節 方法論について	147
第三節 国家論について	148
第四節 経済学について	149
第五節 現存社会主義について	149
第六節 具体的分析について	150
第七節 社会政策の危機と社会政策学の危機について	151
結 論	152
 第七章 社会的矛盾の解決はその鈍化によるか激化によるか ——プレハーノフのストルーヴェ説批判——	
まえがき	154

序 プレハーノフとストルーヴェ	155
第一節 定式Ⅰ＝矛盾の定式	157
第二節 定式Ⅱ＝鈍らされた矛盾の定式	158
第三節 定式Ⅱの誤謬	159
第一項 「生産諸力と財産関係との矛盾」の「経済と法律との矛盾」 へのすりかえ	159
第二項 歴史的現実との不一致	161
第四節 定式Ⅰの誤謬	164
第五節 K. マルクスの矛盾の定式	167
第六節 資本主義社会の矛盾の鈍化の理論に対するローザ・ル クセンブルクの批判	168
あ と が き	170

第八章 社会政策・社会福祉の動機について政策担当者ベレガー

ド前大臣はいかなる「証言」をしたか

ま え が き	172
第一節 ベレガード発言直前の四人の見解	175
第二節 政策担当者側の見解——R. ベレガード女史——	177
第一項 政治としての社会政策＝社会福祉	177
(1) 社会政策＝社会福祉の政治的側面	177
(2) 社会政策＝社会福祉の政治的機能	179
(3) 社会政策＝社会福祉の政治的起源	182
第二項 社会政策＝社会福祉における経済と政治	182
(1) 経済的原因, 政治的結果および政治的対応	182
(2) 経済的経費か政治的機能か	184
第三項 1980～90年代の社会政策＝社会福祉の危機	184
第四項 ベレガード説の特質	185
第五項 ベレガード説をめぐる疑問	186
第六項 総 括	186
資料1 ベレガード発言の原文(英文)	187
資料2 ベレガード発言の「ぎょうせい」版訳・訳文	190
資料3 ベレガード発言の本稿筆者訳・訳文	192

資料4 ベレガード女史の著書名……………	195
第三節 政策担当者側の見解——ベレガード発言直後の三人の 見解——……………	196
結 論……………	198
あとがき……………	199
第九章 国内外の援助の動機は弱者の救済か——G. ミュルダー ル説における福祉国家の限界と福祉世界の展望——	
まえがき……………	202
第一節 社会政策の価値評価……………	204
第一項 価値評価……………	204
第二項 高次の一般的な価値評価……………	205
第三項 平等主義の価値評価……………	205
第二節 福祉国家……………	207
第三節 福祉国家の生産性……………	208
第四節 福祉世界の展望……………	210
第一項 低開発国と平等主義……………	210
第二項 援助の動機……………	211
第三項 福祉世界……………	211
第五節 ミュルダー説の特質……………	212
第一項 方法の独自性……………	212
第二項 通念の打破と先進性……………	214
第三項 視野の広さ……………	214
第六節 ミュルダー説をめぐる疑問……………	215
資 料 長洲一二氏によるミュルダー説の紹介と評価……………	216
結 論……………	221
資料I 経済学とは何か——その対象と方法と任務——	
まえがき……………	224
第一節 マルクス『経済学批判』・「序言」……………	226

第二節 エンゲルス「カール・マルクス：経済学批判（書評）」…	231
第一項 ブルジョアの生産と交換の法則の連関的な展開……………	231
第二項 弁証法的方法……………	232
第三項 唯物史観……………	234
第四項 経済学の歴史的批判と論理的批判……………	236
第五項 経済学の対象＝ものとして現れる人と人との関係、階級と 階級との関係……………	237
第三節 エンゲルス『反デューリング論』・第二篇「経済学」・	
第一章「対象と方法」……………	238
第一項 生産・交換と分配の衝突……………	238
第二項 生産・交換・分配の条件と形態についての科学（広義の経 済学）……………	240
第三項 資本主義的生産様式を対象とした経済科学（今日までに我 々が持っている経済科学）……………	242
第四項 経済科学の任務……………	244
結 論……………	245

資料Ⅱ 日本史はいかに時代区分されるか

ま え が き……………	248
第一節 邪馬台国女王卑弥呼（189年頃）より大化改新（645年） までとそれ以後……………	249
第二節 源平合戦（1180～1185年）……………	254
第三節 天下一統（1467～1590年）……………	258
第四節 明治維新（1868年）……………	262
第五節 敗 戦（1945年）……………	269
結 論……………	271

資料Ⅲ 社会的サービスの政治的機能とは何か——J. H. ガルパ

ー説における社会政策＝社会福祉の体制維持の役割——

ま え が き……………	276
第一節 社会的サービスの政治的情况……………	277

第二節 社会的サービスの政治的機能	279
第一項 服従と保守に順応させるための対象者と従事者の統制.....	279
第二項 社会変革に敵対する政治的風潮の維持.....	281
第三節 記者によるガルパー説の紹介と評価	285
結 論	288
資料IV 我が国の農漁民はだれに、なぜ、いかに賃労働を強要さ	
れたのか——1970年代前半の東北地方の農漁村における兼業	
・ 出稼ぎ・流出の実態——	
ま え が き	290
第一節 秋田県東成瀬村の農民——1971年——	292
第二節 岩手県田野畑村の漁民——1972年——	295
第三節 青森県柏村の農民——1974年——	297
第四節 山形県朝日村の農民——1975年——	300
結 論	302
初 出 一 覧	303

第一章

社会政策はいかにして資本主義を
維持しようとするか